

## 実践報告

# 「医療職育成課程における多言語演習 ～医療通訳を使うためのユーザートレーニング」

医療通訳研究会 (MEDINT)  
村松 紀子

近年、外国人を見かける機会が増えてきた。訪日外国人観光客は年間 3000 万人を越え、在住外国人は 362 万人 (2018 年 6 月末) で過去最高の人数となった。医療現場にも日本語の通じない外国人患者がやってくる。日本人にも様々な患者がいるように、外国人患者ひとりひとりを取りまく環境は違う。日本語能力、日本での滞在年数、在留資格、家族関係、住んでいる地域、日本での活動の内容によって、個性が存在する。こうした多様な外国人患者から適切なアセスメントを取り、治療につなげていくためには、医療職にも異文化理解とコミュニケーション能力と医療通訳運用能力が必要である。現任者教育も重要であるが、ここでは大学や大学院の学生に対する「国際看護」「多言語演習」の実例を紹介しながら、模擬患者を使った多言語演習と医療通訳を使うためのユーザートレーニングについて紹介したい。

模擬患者 (SP Simulated Patient) は一般的な医学教育の中にも使われている。ここで模擬患者を使う意義は、学生が外国人患者から学び、外国人患者自身が、日本の医療者を育てるという視点である。

対象は看護学生 (医療職育成課程であれば、薬学や作業療法士、理学療法士、臨床検査技師や救急救命士、MSW など外国人患者と関わりを持つ医療専門職に応用が可能) で、すでに 1 度以上実習を終えた者。実習の中で、外国人患者に出会い、対応をした経験を持つ者であることが、より望ましい。そうした学生は、「あのとき、外国人患者とどのようにコミュニケーションをとればよかったのか」という思いを少なからず抱いているため演習における目的意識が高くなる。外国人患者を想像の範囲ではなく、具体的な対象者として理解できる。授業の流れとしては、理論と演習を組み合わせた 2 コマ (90 分 X 2) を基本とする

## (1) 日本にいる外国人患者の現状理解

まず、在住外国人、訪日観光客、医療ツーリズムの患者の違いを理解する。日本に住んでいる外国人にはどの国籍の人が多く、その人達に英語が通じるかどうか、どのような活動を行っているか、その文化背景の多様さ、在留資格についても理解する。また、日本の社会保障の中の外国人

住民の権利についても歴史的な経緯を含めて学習する。

## (2) やさしい日本語<sup>1</sup>の使い方

在住外国人の国籍は、アジアを中心に多岐にわたる。英語が通じるとは限らないことを理解し、共通語としてのやさしい日本語 (Plain Japanese) の有用性についての説明を行う。学生の中には英語が得意でないため、外国人患者に苦手意識を持つ者もいる。しかし、外国人患者にも英語ができない人たちがおり、その場合、日常生活は日本語で行っているため、レベルの差はあるが、共通語が日本語であるという話をすると、外国人医療に対して親近感を抱く。ここで、外国人患者が医療現場の専門用語を理解するよりも、医療者がやさしい日本語で話すことが合理的配慮となることを理解し、具体的に「やさしい日本語」の基礎について学び、実際に使ってみる演習へと繋ぐ。意識的に日本語を話すという経験により、「正しい日本語」ではなく、通じる日本語は、患者によって違うということを理解する。

## (3) 模擬患者演習

日本語能力試験 (JLPT)<sup>2</sup> において、N5 (基本的な日本語をある程度理解することができる) から N4 (基本的な日本語を理解できる) 程度の、生活者としての外国人で英語以外の言語を母語とする模擬患者を選定する。最初に、模擬患者の国籍と言語、主訴のみを伝えて、一般的なアセスメント (表 1 は妊娠 7 ヶ月で来日した妊婦の初診) を行ってもらふ。質問の中には、本人を特定するものの他に、「はい」「いいえ」で回答する「クローズド・クエスション」と、制



1 やさしい日本語 <http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/EJ1a.htm>

減災のためのやさしい日本語として、災害時に有効な言葉として考案された。

2 日本語能力試験 (JLPT) <https://www.jlpt.jp/>

表1

|  |
|--|
| 質問の一部（産科）<br>1：お母さんの名前<br>3：予定日<br>4：何人目のこどもですか？<br>6：宗教上、食べられないものはありますか？<br>7：血圧を測ります。<br>9：おなかは張りますか？<br>10：帝王切開を希望しますか？無痛分娩を希望しますか？<br>11：出産について、何か不安なことはありますか？ |
|--|

約をつけずに本人に自由に話してもらい「オープン・クエスチョン」の両方を入れて、オープンクエスチョンの聞き取りはたとえ質問は伝えられても、回答は通訳がいなければ得ることができないものもある。その違いに気づくこと。必ずしも教科書で日本語を学んでいない模擬患者については、その人の日本語の癖を探りながら、より伝わりやすい言葉を選び、また言語以外の表現方法（目線、表情、ジェスチャー、人体図を示す、数字を書くなど）を演習の中で学生自身が発見していく。看護職を志す学生は、どちらかといえば、こうした「察する」「伝える」能力が高いと思われる。また、アセスメントに関しては、入院場面と救急場面や災害場面では時間の制約が異なるため、時には時間制限を設けて聞き取りを行う練習も必要である。

**(4) 気づきの振り返り**

模擬患者演習の後に、必ず振り返りを行い、学生が自分たちで見つけたコミュニケーションの工夫などを共有する。また、同時にやさしい日本語やジェスチャーは内容によっては限界があることを理解し、多言語ツールや医療通訳の必要性を実感する。

**(5) 多言語問診票、音声翻訳ソフト、その他コミュニケーションツールの活用**

すでに、日本の中にある社会資源である多言語問診票をはじめとする多言語ツールを紹介し、その有効な使い方を工夫する。医療に関するなんらかの多言語ツールを探してくるという宿題を出してもいいかもしれない。また性能が向上している音声翻訳ソフト（この授業では VoiceTra<sup>3</sup> を利用している）を使ってどの程度模擬患者に伝わるかを体験する。早口や長文、難解な表現方法が音声翻訳ソフトに向かないことを理解し、こうしたツールは使う人間の使い方によっては大きな力を発揮することに気づくことができる。

**(6) 医療通訳を使ってアセスメントの答え合わせ**

ここではじめて医療通訳者を導入する。通訳者が入る前は、「はい」「いいえ」など、あまり言葉多くなかった外国

人患者が、通訳を通して饒舌に話し始め、学生は外国人患者からの情報量が格段に増えることに気づくことにより、医療通訳者の重要性が実感できる。

**(7) 医療通訳を使うためのトレーニング**

ここから、医療通訳を「使うため」のトレーニングを試みる。医療通訳が本当に必要な場面はどこであるか、どのような言葉が正しく伝わるか、日本語が母語ではない医療通訳者への配慮だけでなく、医療通訳者の役割や行動規範についても説明する。まずは、それぞれの立ち位置の意味を理解し、外国人患者や患者家族ときちんとアイコンタクトをとること、多少説明に時間がかかることを知るとともに、外国人患者の前で話されたことは、医療通訳者はもらさずすべてを訳すということなどを実演まじえて説明する。このトレーニングは、医療職だけでなく、司法や行政、教育といったコミュニティ通訳を使うすべての専門職に共通するものであり、応用可能である。

**(8) 模擬患者からの講評**

最後に医療通訳を通して模擬患者に母語で自分の体験談を語ってもらい。通訳を通すことで、今まで知ることのなかった外国人患者の心細かった体験やつらかった気持ち、患者側の視点などを直接外国人患者から聞く機会が持てる。また、外国人患者が日本の医療職に求める資質ややさしい日本語演習における感想なども、学生達に伝え、自分たちを将来的に支援してくれる医療者の育成に寄与する。

**(9) 終わりに**

医療通訳ユーザートレーニングの前に、様々な外国人患者に関する背景ややさしい日本語の技法、多言語ツールの利用などを学ぶのは、医療通訳の役割は従来の外国人医療の一部でしかあり得ないということを学ぶためである。医療者自らが、外国人患者を特別視するのではなく、適切で合理的な配慮の下で、他の日本人患者と同様に接していきける社会には、当たり前な社会資源としての「医療通訳」が存在することを理解してもらいたい。また、このトレーニングはコミュニケーションの調整役である医療通訳者自らが行うことが望ましい。

3 VoiceTra <http://voicetra.nict.go.jp/index.html> 国立研究開発法人情報通信研究機構(NICT)の“音声認識・翻訳・音声合成”技術をS活用した音声翻訳アプリ。31言語に対応している。救急隊用の「救急VoiceTra」は全国の消防本部に提供が開始されている。